



研究所だより

島田 圭一郎(協同総研理事長)

年明けからNHKで明治維新へ幕を開き、激変の時代を駆け抜けた「龍馬伝」が放映されている。時代と情勢のちがいはあれ、我々も絶えず足元を直視しながらグローバルな視野を持ち、今日の社会を根底的に改革していく歴史的使命感を持たなければならないと思う。

今年のトピックスはなんと言っても「政権交代」。耐えがたい生活の困難と社会の閉塞感を何とか打開してほしいという国民の思いが爆発した。日本の民主主義にとって歴史的、画期的な出来事である。その根底には、世界的危機を引き起こした人の命より金儲け第一のグローバリズム、高度経済成長以来の政治・経済・社会システムの破綻があり、まさに歴史的な大転換期にある。

その期待を受けスタートした民主党政権だが、今何をどう変えようとしているのか。政官財癒着でない「政治主導」も大事、事業仕分けという新たな試みもよい。しかし、何のための削減なのか肝心な大目標は示されず、3カ月を経過した今日まで、持続可能な新しい日本社会のグランドデザイン、中長期的な社会経済構造改革戦略は見えない。新政権への民意反映等の仕方も閉鎖的で理解に苦しむ。このままでは、旧政権への先祖返りを望む人は少なくとも、鳩山政権への期待感も急速に失われかねない。

今大切なことは、誰が社会変革の基本軸に座るかである。政権政党が変われば、即明る未来が開けるほど歴史は甘くない。従来の「官頼み」や「お任せ民主主義」と決別し、市民、働く人自らが真に社会の主人公になる、地域や国を変える原動力になるシステムを本気でつくることである。有権者が選挙のときだけの主役ではない。

協同総研は、これまで「新しい公共と市民自治」をテーマに連続研究会を開き、協同労働による就労創出や地域再生の実践を基に意義や意味を解明しつつ、社会革新の主体形成について理論的、実践的研究を行ってきた。近年は、「中山間地農業の再生と協同労働の可能性」についても研究を深め、生活や地域と直接結び合う自律的で多様な事業創造も追求している。

市民が心を合わせ、力を合わせ、助け合い、協同労働により明日の地域、国をつくる主導力をもっともっと強めなければならない。700を越す自治体での法制化意見書採択をバネに歴史の歯車を大きく回すときだ。

今年は2年に1度の協同集会在四国・香川で開かれる年である。協同総研としても情勢にふさわしい研究活動を広げ、歴史的使命を果たしたいと考えますので、一層のご支援、ご指導をお願い致します。